

死体置場は空の下

死体置場は空の下

ポケット文春 112

1963 年 5 月 18 日 初版発行

定価 200 円

著 者 ゆう き しょう 結 城 昌 治 ©

発行者 小 野 詮 造

発行所 文藝春秋新社
東京都中央区銀座西 8 ノ 4

印刷 大日本印刷

製本 加藤製本

落丁乱丁がありました場合はお取りかえいたします

死体置場は空の下

結城昌治

文藝春秋新社

死体置場は空の下／目次

第一話	死んだ依頼人	五
第二話	律気な恐喝者	三三
第三話	儲けそこない	六四
第四話	意地悪パーティー	九七
第五話	死体置場は空の下	一三〇
第六話	オメカケだって楽じゃない	一六七
第七話	川を越えた死体	二〇二

裝幀
東君平

第一話 死んだ依頼人

I

久里十八探偵事務所からの電話で起こされたのは、朝の八時半ごろだった。

「今朝の新聞をみたか」

勢いこんだ久里十八の声が聞えた。

「いや」

せつかくの眠りを妨げられて、わたしは腹をたてていた。

「それじゃ、すぐに新聞を読んで事務所へきてくれ。たいへんなことができた」

「新しい仕事なら断ります。ぼくは今朝の三時すぎまで仕事をしていて、まだ五時間位しか眠っていない」

わたしはそれだけ言つて送受話器を降ろした。嘘ではなかった。すると、すぐにまたベッドの脇の電話機が鳴った。

「話だけでも聞いてくれ」

また久里十八の声だった。

わたしは何も言わずに送受話器を置いた。

それから三十分、あるいは一時間近く経ったかも知れない。

「久里十八だ、頼むから開けてくれよ」

今度はドアをノックする音だった。

わたしは已むなく起上った。着替えてから、ドアの内鍵をはずしてやった。

ずんぐりとカボチャのように太った体が転がりこんできた。息をきらして、トマトのように赤い艶のある顔をみれば、興奮していることがわかった。

「今起きたのか」

久里十八は禿上った額の汗を拭いて言った。

「久里さんが来なければまだ寝てました」

わたしはタバコの火をつけて、ベッドに腰をかけた。

「相変らず殺風景な部屋だな」

十八は部屋を見回した。

スプリングの利かなくなったベッドの脇の、ナイトテーブルの上に電話機とトランジスタラジオ、あとは薄汚れた壁にモジリアニの複製がピンでとめてあるだけだ。確かに殺風景かもしれない。しかし、久里十八の感想は余計だった。

「何の用です」

わたしは不機嫌に言った。

「朝刊を見たか」

「見ません」

わたしは新聞をとっていない。朝刊は、朝食代わりに、近くのレストランへトマトジュースを飲みに行つて読むことにしている。

「それじゃ、話の前にこれを読んでくれ」

十八は上着のポケットにつつこんでいた新聞をだして、読ませようとする記事を指さした。
わたしは黙つて受取つた。

『――人妻殺さる』

顔見知りの犯行か』

四段ぬきの見出しだった。

――十六日午後四時三十分ごろ、東京都新宿区本塩町××会社社員海東保敏さんの妻雅子さん（二六）が自宅六畳間で死んでいるのを、買物から帰ってきたお手伝いさんの伊藤ヤス子さんが見つけ、四谷署に届出した。

警察の調べによると、雅子さんは抵抗の際柱の角で後頭部を強く打つて死んだらしく、金品を奪われていない点などから顔見知りの怨恨による仕業ではないかと見られているが、伊藤さんや近所の人は、夫婦仲もよくて雅子さんは怨まれるような人ではなかったと言っており、夫の保敏さんも思い当るようなことはないと言っている……。

「どうだ」

十八はわたしが顔を上げるのを待ちかねて言った。

「どうだと言われても、返事の仕様がなかった。わたしは新聞を十八に返した。」

「殺された女は、うちの依頼人なんだ」十八は秘密を洩らすような口調で言った。「依頼にきたのは八日の正午ごろ、夫に女がいるらしいから調べてくれと言ってきた。そして昨日の夕方、調査結果を聞きにくる約束になっていた。ところが、夜の八時すぎまで待ったが彼女は現れない。そして今朝の新聞をみたら、殺されていたというわけだ。調査の基本料金は契約のとき受取ったが、実費はもちろんまだ貰っていない。このままでは大損害だ」

「なるほど」

わたしは頷いた。久里十八の言いたいことが漸くわかってきた。

「手をかしてくれないかね。もちろん分け前は充分に考える。わたしは徹夜の仕事がつづいて参ってるんだ」

「ぼくも今朝方まで、神田の内外興信所の仕事で疲れています」

「しかし、きみはわたしより二十も年下だ。弱音はきみの若さに似合わない」

「話を聞きましょう。その調査結果はどうだったんです」

わたしはどうせ逃げられないと思って観念した。久里十八がもってくる仕事は、彼の手に負えないか、手に負えたとしても、自分ではやりたくない仕事にきまっていた。そしてわたしは、そんな仕事を押しつけられることに馴れていた。

「女というものは恐ろしいな、女房の睨んだ眼に狂いはなかった。相手は会社のタイピストで海東保敏の部下だ。年は二十四五歳になっているかも知れないが、色の白い、ほっそりした感じの美人だ。背は高いし、服装もなかなかしゃれている。その女のところへ、海東はたった六日間に二晩かよった。むろん泊りはしなかったが、彼女は定時間の五時ごろ退社する。彼の方は七時ごろまで社にいて中野のアパートへ行くと、彼女がちゃんと夕飯の支度をして待っているという仕掛けだ。女の名は尾城俊江」

「海東は会社で何をやっているんです」

「業務課長だ。三十七歳で理研石油の本社の課長だから、仕事の方でもかなりやり手にちがいないな」

「殺された女房はどんな女でしたか」

「尾城俊江ほど美人ではないが、まあ美人の方だろう。年齢の割に子供っぽい感じで、笑うとてもチャーミングだった」

「夫の不貞調査を頼みにきて、笑うようなことがあったんですか」

「そうガラガラ笑ったわけではない。愛嬌をみせた程度だ」

「この新聞記事以外に、今度の殺人事件について何かご存じですか」

「いや、何も知らない。新聞を読んで、びっくりしてとんできたんだ」

「海東雅子を殺した犯人として、亭主を疑ってるわけじゃないでしょうね」

「まだそこまでは考えていない。とにかく、今きみに頼みたいのは、女房に頼まれた調査の報

告書を、亭主のところへ持って行って調査費を受取ってくることだ。あるいは、バカ高い値段で報告書を買取ると言いだすかもしれないが、その辺の呼吸はきみに任せる。そして分け前は半分ごっこだ」

十八は涼しい顔をして言った。迂遠な言いまわしは、うまくいったらありったけの金を巻き上げてこいという恐喝の教唆に等しかった。

久里十八は善良な男である。いつも金がなくピーピーしていて、いつも金のために悪事を企んでいて、そのくせいざとなると、自分では決して電車のキセル乗車もできない男なのだ。今度のことについても、その辺にザラにいる悪質な私立探偵なら、ボロ儲けに絶好の機会だろう。殺された女は夫の素行調査を依頼してあって、その夫には愛人のいることが明らかにあったのである。警察に知られたら当然夫が疑われるはずだし、会社には知られたとしても、夫保敏の立場は困難になるはずだった。久里十八の調査報告書に、かりに十万円の値段がついても不思議はない。脅し方次第では、二十万円にも三十万円にもなりうる代物なのだ。

久里十八はそれを知っているから、そして、自分では所定額以上の金をとることができないと分かっているから、話をわたしに持込んできたにちがいがなかった。

わたしは十八に買いかぶられたことを光榮に思い、一万円にも満たぬ調査実費の明細書と、調査報告書の写しを十八から受取った。

久里十八が帰ってから、わたしは一時間ばかり眠り直してアパートを出た。近所のレストランでトマトジュースを飲み、朝刊の記事をゆっくり読返した。十八の持ってきた新聞には載っていないかったが、レストランでとっている新聞には殺された海東雅子の写真がでていた。少しピンボケだが、美人であることはわかる。記事にはほとんど差異がない。

わたしは今朝方までかかっていた仕事の報告を電話ですまして、新宿から地下鉄に乗った。四谷三丁目下車、そこから国電信濃町駅へむかって歩けば、四谷警察署はすぐ左側である。高い石段の上の玄関には、すでに捜査本部の看板がかかっていた。

捜査係の大部屋へ行く廊下で、ちょうど郷原部長に出会った。

「何もないぞ。話があればあとで聞く」

わたしを見たとき、部長は手を振って言った。

「まだ何も言ってますんよ」

「言われなくても分かっている」

部長はとりつくシマがなかった。睡眠不足のせいか、大分気がたっているらしい。部長はそのまま行ってしまった。

しかし、わたしは諦めなかった。玄関を急ぎ足に出る後姿をみて、部長の行先に見当がつい

た。わたしはしばらく間をおいて、四谷署から百メートルほど外苑寄りの大衆食堂太平軒へ行った。

果して、部長はガラ空きの細長いテーブルの隅に、小柄な背中をまるめて腰かけていた。わたしは部長の斜め向かいに腰かけた。

部長は露骨に不機嫌な顔をして立上りそうになったが、そこへカツ井が運ばれて湯気をたてた。

部長は恨めしそうな眼でわたしを睨み、それからムツとしたような視線をカツ井に落した。

「昨夜は徹夜ですか」

わたしは愛想のつもりで言った。

部長は無言で割箸を割った。そして猛烈な勢いで食べ始めた。

「本塩町の殺しについて情報を提供します」

わたしは海東雅子が殺される一週間前に、夫の素行調査を依頼していたことを話した。夫保敏に愛人のいたことは隠しておいた。

部長は恐るべき速さでカツ井をたいらげた。

「――以上です」

わたしは話を終った。

「ありがとう」

部長は冷めかかった番茶を飲みこんで、そう言っただけだった。そして十円玉を六つ数えて

テーブルに置くと、ハブラシのような口ひげをこすって立上った。わたしの話は部長の関心を惹かなかったようだ。

「まだ肝心な話が残っています」

わたしは慌てて引止めた。

部長は疑わしそうな眼でわたしを見降ろした。しかし、このまま逃げられぬことは覚悟していたようだった。わたしがタタで情報を洩らすわけではないのだ。部長も駆け引きが上手^うくなっている。

「聞こう」

部長は立ったまま言った。どうせろくな話ではあるまいといった顔つきだった。

「その前に腰を降ろしてください。そして、ばくの質問に答えてからでなければ話せない」

「重大な話か」

「もちろんです」

「断っておくが、警察は私立探偵の情報をアテにしていないし、その情報と交換で、あんた方の商売の手助けをする気も持っていない」

部長は役に立たぬことを言いながら、渋々腰を降ろした。どんなに小さな情報でも、喉から手がでるほどに欲しいことは、そのような虚勢の張りかたに表れていた。

「雅子の死因はわかりましたか」

わたしは訊いた。

「まだ解剖結果の報告がきていない」

部長はわたしを見ないようにして答えた。

「犯人の見当は？」

「皆目不明だ。犯人らしい人物の指紋も見つかっていない」

「亭主を調べましたか」

「調べた。アリバイが立っている。被害者は女中が買物に行っている二十分間位の間に殺された。しかしその時刻に、亭主はちゃんと会社において販売会議に出席している。勤め先の理研石油本社は日本橋茅場町だ。自宅まで片道だけで三十分かかる。せつかく君の親切だが、亭主を疑うわけにはいかない」

「目撃者は？」

「その点はなしともありとも言える」

「どういうわけですか」

「それを話す前に、この辺できみの話の方に戻ろうじゃないか」

「いや」わたしは頑張った。「最後の質問ですからお答えください。これ以上は訊きません」

「うむ」部長は少し考えた。「実は、伊藤ヤス子という女中が買物にでたとき、路地の曲り角で一人の女に擦れちがっている。髪を茶色に染めて濃いサングラスをかけ、服装はベージュ色のワンピースに黒いサッシュ・ベルト、ちょっとバーの女のような感じだったという」

「よくそこまで観察しましたね」

「女というものは、いつだって同性に対する観察を怠らないものだ。つねに自分と比較する習慣がついている。女中の記憶はその習練のたまものだろう。サングラスをかけた女は、路地を曲って海東家の方へ行った」

「被害者の家に入ったんですか」

「いや、そこまでは見ていない。その路地は通りぬけられるから、あるいはただの通行人にすぎなかったとも考えられる」

「それだけですか」

「それだけだ。サングラスの女の正体はわかっていない」

「被害者の家族は、夫婦のほかに女中だけでしたね」

「そうだ。結婚して五年になるが、子供はいない」

「それでは——」

わたしは保敏に尾城俊江という愛人のいることを話した。

「——尾城俊江が髪を染めていたという話は聞きません。しかし、黒い髪を脱色して茶色にすることは簡単だし、さらにそれをもう一度黒に戻すことも簡単でしょう。サングラスは安物が出まわっているし、服装はデパートのトイレで着替えることができます」

わたしはそう附け加えて立上った。これだけ言えば、あとの捜査は、黙っていても部長が自分でやるはずだった。